魔界水滸伝3

栗本薫

KADOKAWA NOVELS

妖怪や魑魅魍魎たちは戦争開始！
事態は最悪へと…。人間界を守るのは誰か
絢爛壮大な伝奇SF巨編・第三弾。

角川

カドカワノベルズ

昭和五十七年八月二十五日初版発行
昭和五十九年十月　十　日八版発行

著　者　栗本薫（くりもとかおる）
発行者　角川春樹

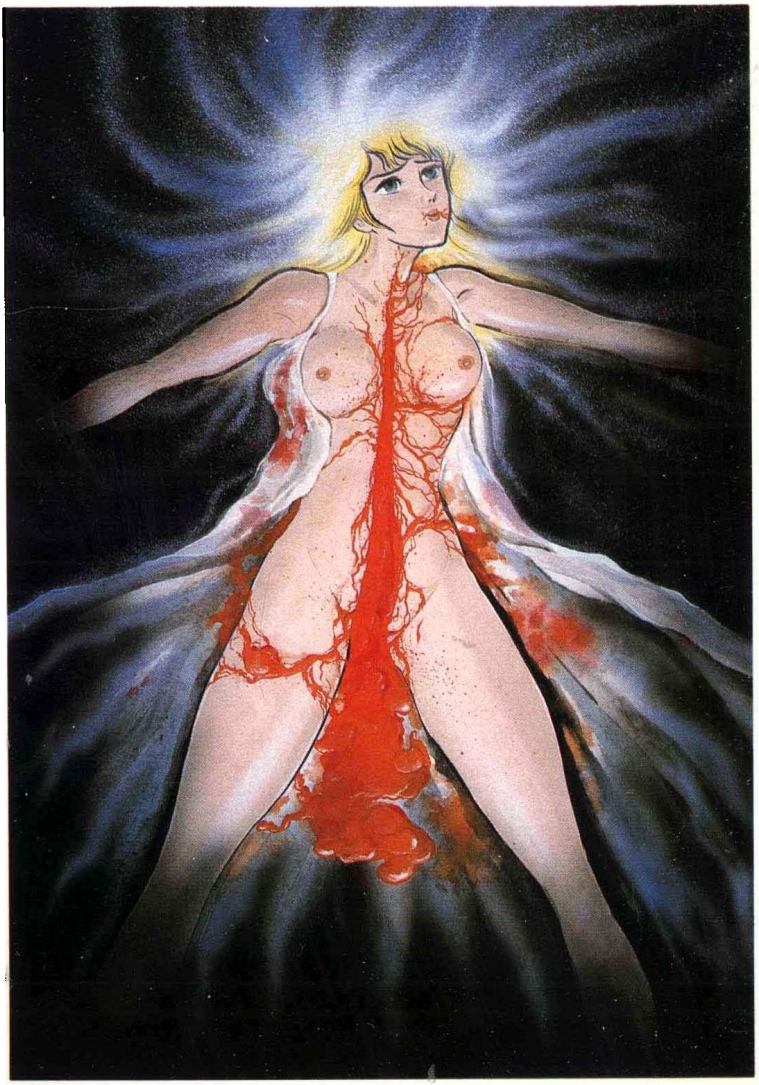
魔界水滸伝（まかいすいこでん）3

印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　株式会社多摩文庫
装丁者　岡村元夫

発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見一二三　振替東京三一九五二〇八
〒一〇二　電話　営業〇三一二三八一八五二一　編集〇三一二三八一八四五一

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします
ISBN4-04-770903-4　C0293

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo



KADOKAWA NOVELS

魔界水滸伝3

栗本 薫

カバー絵・口絵・本文イラスト／永井豪

目次

第十章　悪夢 1　11
悪夢 2　23
悪夢 3　33
悪夢 4　45
第十一章　虎 1　56
虎 2　65

虎 3 78
虎 4 85
虎 5 92
第十二章 高皇産霊（たかみむすび） 1 100
高皇産霊 2 112
高皇産霊 3 122
高皇産霊 4 134

第十三章　凶星集う　0　145
凶星集う　1　152
凶星集う　2　159
凶星集う　3　168
凶星集う　4　179
凶星集う　5　190
凶星集う　6　199

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

凶星集う　7　212
第十四章　告知　1　227

第十章

悪夢　1

さわさわさわ――

風が鳴った。

別にどうということはない、ごくあたりまえの風の音である。しかし怯えた心にきくせいか、その風すら、妙にあやしく化け物の咆哮じみたひびきをひそめ、いやになまぐさく、ふわりと顔を吹きつける――ような気がしてならぬ。このせまい山道にわけ入るまえに、さんざんきかされた気味のわるい伝説やら言いつたえのせいなのか、それとも、道に迷ったのかもしれないという、内心のひそかな恐怖のゆえか。

ギャーッと声をたてて鳥がバサバサと梢をとびたってゆく。きゃっと悲鳴をあげて互いに身をよせあったが、

「なんだ、――鳥かあ」

むりに自分と連れとを元気づけようとしてでもいるかのように、ひとりがふるえる声をたてた。いかにもそれは空元気めいてひびいた。

「やだなあ、もう――さっきの、茶店のばあちゃんの話じゃ、もうそろそろ、山のてっぺんの見はらし台が見えてきても、いいころなんじゃなーい？」

「うーん――もう、たしかに、一時間はあるいてるわよね」

「もっとかもしれないよォ。あ、くたびれた。もう歩くのイヤ」

まわりはしんとしずまりかえった山中である。

そろそろたそがれのせまるころあいとあって、深緑の木々はいよいよ影を濃く、そびえたつ岩肌は、声を妙にいんいんと木霊させた。たしかにそれは神域の名にふさわしかったかもしれぬ。もっとも、その山のもつ、奇妙なくらいに神韻縹渺とした雰囲気、というかわるくいえば妖怪じみた空気を、はっきりそうとこの登山者たちが感じとっていたかどうかは、もうひとつ

うけあえたものではなかった。
なぜなら、同じようにリュックをせおい、一人は白いブラウス、もうひとりは赤いトレーナーに下は同じようにジーンズとバスケットシューズ、しゃれた日ざしよけの帽子に水筒、というかっこうの、二人のこの侵入者は、とうていそんな、神秘だの妖怪変化とは縁もゆかりもなさそうだと、一見してわかったからである。
妖怪だの、怪物だとかいわれたら、怖しがるよりもさきに、きゃあっと声をたてて笑いころげそうだ。いうところの、箸がころげてもおかしい年ごろである。怯えてさわぎたててさえ、その悲鳴が嬌声をはらんでいるように華やかで、とうてい妖怪などを、よせつけるべくもないのではないかと思われる。
十九か、はたちか、もうすこしはいっているか。——しかし、昔ならもう、人妻で、子どものひとりもあって少しもおかしくないその年ごろも、いまの時代では、むしろまだ少女の名こそ似つかわしいぐらいにおさなく、あどけなくみえる。——ことに、一方の、髪の長いほうはそうだった。
どうして映画界、モデル界、タレントあっせんにうつつをぬかす連中が、これほどの上玉に目をつけないのかとふしぎになるような、玲瓏の美少女、という感じである。ちょっと古めかしいその表現がこのくらい、ぴったりする娘も珍しい。
品があって、ぬけるように色白だ。黒目がちの大きな目、ほっそりとはかなげなすがたかたち。
白いゆったりしたオーバーブラウスがよく似合ってはいるが、着物をきせた方がもっとずっとよく似合いそうだった。
それだけに、連れとの対照の妙がみごとにみえた。連れも、なかなかの美少女である。
しかし、これはまったく、彼女とはおもむきを異にしていた。何から何まで、わざわざ対照的にそろえたとでもいいたげに、はやりの極端なショートヘアに、浅黒くやけた肌、ファニー・フェイスの生き生きとした顔立ち——ぱっと見れば、赤いトレーナーに、ジーンズもはやりの七分丈のこの娘のほうが、先にひと目をひきつけたかもしれない。
白いブラウスの美少女が花にたとえれば白いひっそ

りした玉椿だとすれば、彼女はやはり真赤なバラだろう。派手やかで、勝気そうだ。ショートヘアがよく似合って、スポーツもたんのうそうな、しなやかな細身のからだつきが、いかにも少年めいてかわいかった。そのふたりがよりそっているところは、妙に宝塚めいてひと目をひかずにはおかぬ感じだった。

「ねえ、まり子——ほんとに、まちがいないの、これで？」

「まちがいもなにもさあ、一本道じゃん。迷いようがないわよ。あ、あ、とにかく一服させてえ。禁モク症状がきた」

赤いトレーナーの美人——麻生まり子はどしんと荒っぽく道ばたの岩に腰をおろし、ポケットをさぐった。

「ちょっと、計画のたてかたがムチャだったのかしら」

「かもね。けどまあ、たまにはいいじゃん、冒険すんのも。たださあ——ここで暗くなられちゃうとさ、ピンチなんだよね」

まり子は、その外見上から、どくしぜんに、友人の保護者役をかって出るのが二人の間の習慣になっている。外見だけではなく、性格的にも、たしかに男っぽいものをもちあわせているのだ。

「ところでさ、姫。もうそろそろ、葛城に入ったのかしら。それともまだ、他の山？」

「さあ——もう、そろそろの時間だとは、思うんだけど」

姫と呼ばれた少女は不安そうに胸から磁石をとりだしてみ、ついでに時計をみて、びっくりしたようだった。

「あら、もうこんな時間。ね、まり、そろそろ、茶店へもどってバスにのるか、それともこのままゆくか、決めないと」

「あたしひとりなら、野宿したっていいんだけどな」

「いや、そんなこわいの」

「このへんじゃ、いまどきくまも蛇もいのししも、出ないだろうと思うんだけどな。ま、いいわ、だからひとりならって言ってんじゃない——あんたにまで、あたし流を強制しようなんて思わないわよ。あんたってほんとに怖がりなんだもん、夏姫」

「だって——」

それは――

言うまでもなく、白鳥夏姫とルームメイトの麻生まり子だった。

安西雄介と伊吹涼がさがしているとも知らず、ふたりの少女は、夏休みを利用してその共同研究のテーマ、ということで、大和の国のまんなかにひろがる葛城山塊へと、わけ入る計画をたてたのである。

もっとも、いったい、どのようなきっかけから、他にもいろいろあった候補地の中からその葛城山中を、最終的にえらんだのか、それはもう、彼女たちは、といつめられてもおそらく思い出すことはできなかっただろう。

そのときはばかに乗り気になり、そうだそうだ、それしかない、といった感じでとんとんと話がはこんでしまったのだ。

夏姫の郷里からも、それはさほどはなれているというわけではなかったから、土地カンがあるというほどのことはないまでも、まんざら知らぬ土地でもない――その思いが、いっそう、二人の娘を浮き立たせ、大胆にさせているかのようだった。

その浮き立った気分は、汽車を、それも一時間に一本ぐらいというローカル線をのりつぎ、いよいよかんじんかなめの山中に足をふみ入れるまでずっと持続していたのだが――

少なくとも、まり子の方は、それをまだ、ずっと持ちまわってやろうと心に決めているようすで、山のしんとした静けさの中に入っても、あれこれと話のたねをみつけてはひっきりなしにしゃべりつづけていた。

しかし、まり子よりはもう少し、そういった空気に感応力のある夏姫のほうは、山中にわけいるうちに、しだいに口数が少なくなっていった。

別に、どこがどう違うというのではないが、しかし妙に、彼女をおちつかなくさせるものが、その山の、しんと冷たい空気のなかにある。

声は木々の梢に吸いこまれ、ポタリ、ポタリと岩肌に水がしたたる。夏姫はひそかに、まり子がそんなふうにしゃべりたてなければよいのにと思ったが、そう口に出すことはできなかった。

何か、不安をさそう静けさが、山道を息を切らしてのぼってゆくにつれて、彼女たちの前にひろがってゆ

く。

（どうして、こんな、何もないところに来ようなんて決めちゃったのかしら）

あのとき、どうしてあんなによい考えだと思えたのか。何か、妙なものにとりつかれ、そそのかされていたとしか思えない。もともとたいして民俗学だの伝承だのに興味はないのに、夏休みの共同研究を、大和葛城地方の民間伝承と道祖神、などというテーマにきめてしまっていたことも、いまになると、何となく解せぬ気がする。

いまさらもう、提出した題を、かえることはできなかったが——

「ねえ、まり」

「何？」

「そろそろ、下らない？　暗くなるまえにバス停へ出たいわ」

バスのとおっている、細い国道からでももう、一時間近くわけ入ってきてしまったのだ。

「こんな山ん中、歩いてると、日本が文明国だの自然が失われたのって、まるで嘘みたいに思えるのね、姫」

「うん。でも、ほら、一応、道、ひらいてあるしね」

「そりゃそうだけど」

まり子はなぜ、さっきから早くおりようとうながす自分のことばを、はぐらかしてばかりいるのだろうと夏姫はいぶかしんだ。

しかしまり子のほうは、はぐらかしているなぞと意識していたわけではなく、やがて、不安そうに空を見上げた。

「ちょっと、曇ってきたね。降ってくるとヤだし——おりようか。けど本当は、きょうじゅうにもう、海側へ出てるはずだったのにな。みんな、あの茶店のばあちゃんがわるいんだ。三十分のぼりゃ見晴らし台だなあんて、てんでウソついちゃってさ」

「山の人の足だと三十分なのかもしれないわよ」

まり子が同意したことで、少しほっとした夏姫は笑って、

「でも、あの夫婦、ずっとあんなさびしい山ん中にいて、よく何ともないわね。あたしなら、とってもできないな」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo